

八丈島樫立方言の記述 (その4)

青 柳 精 三

第4章 樫立方言の詞類別の記述(下)

第5章 若干の表現法について

むすび

第4章 樫立方言の詞類別の記述(下)

11. 活用助詞

無活用助詞に対して活用する助詞を活用助詞という。従来の助動詞がほぼこれにあたる。

ンナカ《否定表示》

ンナカは多彩な活用形態を示すことで特徴的である。代表形としてどの活用形をとり上げるべきかは容易でないが、ンとナカを要素として含み、言い切りの活用成態としても用いることができるンナカを代表形とすると便利であると思われる。

ンナカ (ンナッカとも)

オメ^ーャ^ーワ マ^ダ ヨ^インナカ。

あなたはまだ酔っていない。(男・明後→筆者。老人会で)

ワ^ラ マ^バリ^ンナッカ。

私は見なかった。(男・明後→男・大)

ナカ (ナッカとも)

ハ^ライ^ッパイ ナ^リナカ, ソ^レダ^ケ ジャー。

腹一杯にならない, それだけじゃ。(女・明中→筆者夫婦。昼食を振舞ってくれた後で)

ンナイ

シ^ゲア^キオ^ジサンモ ム^リド^ァ シ^ゴト^ワ ア^ンニ^モ シ^ンナイ

ノァノ マダー。

重明おじさんも無理な仕事は何もしないね、まだ。(男・昭初→女・明中。病気が上がりなので無理をしない、ということ)

ナイ (ニャー、ニャとも)

コリャー ヒッカカッテ ヒッカカッテ クレナイ ノァノ。

これはひっかかってひっかかって繰れないな。(女・明中→筆者。独り言に近い)

コリャ イクジカン カカルカ ワカンニャー、イトガ イエズク、
テーニノ。

これは幾時間かかるかわからない。糸がやりにくくて。(女・明中→筆者。糸繰りをしながら、独り言のように)

ンノァ (ンノーとも)

オミャー シマコトバ ツキヤーリンノァト ダメダラー。

あなたは島言葉を使わないとだめだ。(女・明中→男・明後。筆者に島言葉を使おうとしない人を諷める)

マー ショーガツ ドイテ ハナシンノー ジャ、アダン。

まあ、正月なので、[このような縁起の悪い事は]話さないよ、やっぱり。(女・明中→女・明後)

ノァ (ノーとも)

イクラ カネモチデモー イキタクナッケ トコリエ イキノァダラ、
ダレモ、ヨメニャー。

いくら金持ちでも行きたくない所へ行かないのだ、誰も、嫁には。
(女・明中→筆者) ナッケの方はンナカの活用形でなく、補助形容詞として用いられている形容詞ナッケとする。

アツケ アガラ。イマ アガリノート。イソッデ。

熱いのをあがんない。今あがらないと。急いで。(女・明中→筆者夫婦。ニョアゲ《茹でた里芋》をすすめる時)

ナケ

オトコワ オソクテモ ノァノ ヨケドォガ ヨンジューン ナッテ
モ ヨケドォガ。オンナワ ソグッン イカナケイテ。

男は〔結婚が〕遅くともね、よいのだが、40になっても、よいのだ

が。女はそういかないから。（女・明中→筆者）原因・理由を表示する助詞イテが後接する形としては、ンノァ、ンノが多い。例えば、
 オトガ シンノァイテ《音がしないので》、コブチャガ スグニャ
 デンノイテ 《昆布茶が「お湯をさしても」すぐ出ないから》。

ソレ モッチャクドァ ガ、ソラー。モッテデモ キャッテ クレヤ
 ント ノァ／ コマロ ガ ワラー。

それ邪魔だが、それは。持ってでも〔して〕帰ってくだらないとね、困るが、私は。（女・明中→筆者夫婦。昼食の残りの揚げた薩摩芋を持っていってくれという）このンはこれ一例しかないので、ぞんざい発音のものであろう。通常はクレヤンノァトかクレヤンノートとなると思われる。

ンジャロァ（ンジャラとも）

コニャーダワ オジャンジャロァ ガ、キエーワ オジャッタ。

このあいだは〔都の救済事業の仕事に〕にいらっしゃらなかったが、今日はいらしゃった。（女・明後→女・明中）〈否定の完了・過去〉
 ダレダカ ナミャー キキンジャラ ガ。

誰だか名前を聞かなかったが。（女・明後→女・明中）〈否定過去〉

ンジャラ・ラ

ガッコーイ イキノァニ ハカモァ アンシ アツリャールッテ ユ
 ッテ ワガ サワイデ、アツラエンジャララ。

学校へ行かないのに、袴をなぜ詠えるといって、私が〔親に〕文句を言って、詠えなかったっけ。（女・明中→筆者。話者は学校嫌いで小学3年まで通学し、以後は行かなかった。その時の話を思い出して語る）〈回想的過去の否定〉

ンジャッ・タ

ナクラー ミンジャッタ。

〔その建物の〕中は見なかった。（女・明中→女・大）〈否定過去〉

ナカッ・タ

キーワ ココイ キタカ、タカテルワ。キナカッタ、ロー。

今日は、ここへ来たか、和昭は。来なかったろう。（男・大→男・昭初）

ンジャン・ヌー

ゴニン イッショニ ヤッタラ ワカンジャンヌー フ。

〔八丈島の5地区から一人ずつ来て〕5人が一しょに〔それぞれの島言葉を〕やったら分らないだろう。(男・明後→筆者)〈否定推量〉

ジャン・ニャー

オラー マルビンジャンニャーノ。

あの人は死なないだろうさ。(女・明中→女・明後)〈否定推量〉

ジャンヌ・イテ

モチー ドアイテ クサリンジャンヌイテ。

餅だから腐らないだろうから。(女・明中→筆者)〈否定推量〉

ンジャラン・ヌー

トランジャランヌー ガ。

〔餅屋で、出し米を〕とりはしないだろうが。〈否定推量〉

ナ

ヨッパラワ セナト……

酔わすなと……(女・明中→筆者)〈否定命令〉

ズ

ハッキリ シタ コトー オビーワ サズ。

はっきりしたことは知っていません。(T→M)〈言い切り〉

シッカリデ タベキラズン カミキラズン モッチャクダラ。

沢山で食べ切れず、食い切れず、やっかいだ。(女・明中→筆者。貰った蜜柑が多すぎ困るとぼやく)このようにズン(時にズニ)のように無活用助詞ニ(ン)と結合して頻用される。

ウットーシクテ ウットーシクテ。パーマヤサンワ コッチャン
オジャラズ。サカシタマデワ イキキラズ。

うっとうしくて、うっとうしくて。パーマ屋さんはこっちの方〔=檉立〕にはごさいませんし、坂下までは行けませんし。(女・明後→女・昭中。農協の売場で職員に、美容院に行って髪をきちんとしてさっぱりしたい気持ちを訴えている)〈いわゆる“中止法”的な言い切り〉

ジ

ヨワサセジ ショアテ グッニ ミズ ツグッテ ヨ ワケダラ。

酔わさせないようにと、水を〔島酒に〕注ぐっていう訳だ。（前出の無活用助詞グッンの項を参照）

ダラ《判叙・断定》

活用助詞ダラは、体言・用言のいずれにも後接し得て、頻用され、多様な活用成態を示す。言い切りの形として用いられ、他の活用形を説明する際に便利な点を考え、ダラをもって代表形とする。

ダラ

オミノ コトバ ダラ。

〔テープの声は〕お前の言葉だ。（女・明中→女・大）〈断定〉

ショエガツ シタカ ノァー アダンドカト モッテ。

カンギョートァダラー。

〔お前は〕正月をしたかな、どうだかと思って考えたんだよ。（女・明中→女・明後）〈叙述〉

コノ ウエノ ダニニソノ ボーシンシャーワ アロァダラ。

この上の段〔の切替畑〕にその帽子なんかはあったんだ。（M→T）〈叙述〉

ドァ（時にドー、ド、ダに近い時もある）

シッカリ ヤンノー トー タイヘンドァテ オジャル 'ガイ。

〔私は老人会の会長だから〕しっかりやしないと大変なのでございますよう。（男・明中→筆者）〈文末詞ガの項（124頁）参照〉

ナカナカ ワカリノァ ワケドァ 'ガー。

なかなか分らない訳だが。（M→T）

ワラ ソノ ウエデ クソァ カロァ ドァイテ 'サー。

私はその上で草を刈ったのだからさ。（M→T）〈理由表示の助詞イテが後接している。ドァイテは時にドイテに近く発音されることもある〉

オトココック ドー ジャ。

男コックだね。（女・明中→筆者。筆者が台所へ行ってお茶のお湯を沸そうとした時に言う）

ソトノ ホーノ コシッドァダラ。

〔遺体の発見場所は〕外の方の越〔＝海へ落ち込んでいく急斜面〕

なんだ。(M→T)〈ドァとダラが結合し強い断定を表示する〉

ダ

ワラ ハタラコダ、ソノ ヌイモノデ。

私は働いたんだ、その縫物で。(女・明中→筆者)

ソコニ オジャッタダ ノア。

そこにおいでだったんだな。(M→T)

スワンダッチー ジャー。

そうだそうですよ。(T→M)〈伝聞の無活用助詞ッチーが後接〉

ンダ

クワンシテ キレルンダ ジャ。

こうして〔糸が〕切れるんだよ。(女・明中→筆者。糸繰りをしながら) このンダの例は少ない。

ダラ・ラ

ソントキニャ キヤマノ ナッカ ダララー。

その時には、草山の中だった。(M→T)〈回想的過去〉ダララの2番目のラを、分析可能ではあるが、ダララで熟合形態となっていると考える。

ダロァ

ウクア カ'ツヤガ ダロァイテ ノア。

あそこ〔の土地〕は克載のだったからね。(M→T)理由表示の無活用助詞イテと結合している。〈過去〉

テガミ ダロァ ガ。

手紙だったが。(T→M)〈過去〉

ダッ

ジュンサワ ノア、ダレ ダッタ カ、ソレカラ イクニン コァッ
タ カ……

巡査はね、誰だったか、それから幾人変わったか……(M→T)完了・過去表示の活用助詞タと結合している。

ダロー (稀にダロ)

ワガ オカーチャンノ モトウチモ ミネモト ダロー カ。

私のお母さんの実家〔の姓〕も峯本だろうか。(女・明中→女・明

初)〈自問的推量〉

ジッカイモ シナイダ^ロ。

〔老人会のゲートボールの競技をまだ〕10回もしないだろう。(女・明中→女・明中)〈推断〉

ワ^カリン^ノァ コトモ アルダ^ロー, チート。

分らないこともあるだろう, ちょっと。(女・明中→女・明後及び筆者。会話を傍でできている筆者のことについて, 島言葉が分らないところが少しはあるだろうと言っている)〈推断〉

ダラン (ダンとも)

↓
ドーセー マー カンタンナ オガミ ダランヌー ガ[↑]サ。

どうせ, まあ, 簡単なお経だろうがさ。(M→T) 推量の無活用助詞ヌーと結合している。

オ^ビエート^ァ ヒト^ワ ワレ[↓] トリ^ノ ワケ ダン^ノー ワ。

知っている人は私一人の訳だろうよ。(M→T) ノーは推量の無活用助詞ヌーの異形。ダランの方がダンよりていねいな物言いであるという。

ワク^ノ ナミヤ^ーデ クッ ダガ^デ ダカ ワカル ダンニヤ^ーノ。

〔糸繰りの〕杵の名前でこそ誰のだと分るさ。(女・明中→筆者。生糸を見ても誰の糸かわからないが, 生糸に添えて持ってくる糸を巻きとる杵に書いてある名前を見れば, すぐ誰の糸と分ると言っている)〈断言〉ニヤは無活用助詞ニとワの融合形と考えられるがダンニヤは熟合しているともみなすこともできる。

ダレ

タンゴ^ワ オリン^ノーガ クッ ハチ[○]ジューサンモ ナ^ロァ ドアイ,
↓
テー オリン^ノーガ クッ イト^ー モ^ラール^デニ^ノ ムリヤ^リ オ
ロ^ァ ダレ。

八丈織の着物地は織りはしないが, 83歳にもなったので織りはしないが, 生糸を貰うんで仕方なしに〔帯を〕織ったんだよ。(女・明中→筆者)〈クッと呼応したレ結びとなっている〉

ダイ

マン^ダト ナ^オル^ダイ^ドン ノ^エノ ム^カシ^ドー ト ナ^オリ^ノー。

今だとなおるのだけれどもね。昔だとなおらない。(女・明中→女・明後。肋膜炎を患った人の話) 〈ダレ・ドーニが最もていねいな言い方であるが、通常、融合かつ熟合しダイドン、ダイドーなどとなる。

ダリ

トークテ ツエー ツッテ イチンチガカリデモ イカバ ダリ。

〔八幡山には親戚の墓場があるけれど〕遠くて杖をついて1日かかりで行けば〔の話〕だ。(女・明中→筆者)

ダラリ (時にダリ)

マンカラ ノビテ ロクジュー マデダカ ダラリゲーナル ッチエーヤ ノァ↑。

〔定年は〕今から延びて60までだかになるらしいそうだねえ。(女・明後→女・明中)

デ

オー。マヨコシャン 1ズーット イッテ ト 1コシバタデ 1コシデ1カンニャー。

ああ〔そうだ〕。真横の方へずうっと行って、それで、越端〔=海浜へ向かって落ち込む急斜面の上端〕で、越だとも。(M→T) 〈デは中止的に用いられている。但しデカンニャーは熟合しているとみる方がよく、断定表現として文末に頻用される。

ジャ (←デ+ワ) 融合形

ウチー イレトァ ワケジャ ナシ 1サ、ソフ コツー 1ワ。

家〔の中〕へ入れた訳ではなしさ、その骨は。(M→T)

タラ 《完了・過去》

代表形としては、言い切りとして用いられることと他の活用形との関連ということから、便宜的にタラを採用する。

タラ (時にトァラとも、交替形としてラ)

ウキー ヨッテ キタラ。

あそこ〔の前を〕通ってきた。(女・大→女・明中。ヨッテは共通語の“寄って”とは違うという)

サイシヨ イシダト オモッタラッチャ。

最初、〔その海底にひそんでいた大魚を〕石だと思ったそうだ。(男・

昭初→男・昭初)

ダマッテ オッパシッテ イカラ, ソッチ₁エー。

黙って走って行った, そっちへ。(女・明中→女・大。内地から来た人に名前を呼ばれた時, ハイと言うのが恥ずかしくて〔樫立ではオーと言う〕返事をしないで, そっちへ走って行った, という話)

トァ

A: ソレオ ハナシヤッタ。

B: ハニャートァ ジャ。

A: それをお話しになった? (女・大)

B: 話したよ。(女・明中)

オ₁フジガ マダ イキトァ ト₁キニワ マダ アンマリ, ラクデ
ナカンヌー ジャ。

おふじ〔=人名〕がまだ生きていた時にはまだあんまり〔暮しが〕
楽でなかったろうよ。(女・明中→女・明後)

タ (交替形としてッタ・ダ)

ハヤ クチガ キケドァ ヨツツカ イツツノコ, ヤッキヤードァニ,
ウミー。ブンナゲテ オーイソギデ, ニゲタソーダ ジャ。

もう口がきける4歳か5歳の子を, 大変だけれども, 海に投げ捨て
て大急ぎで逃げたそうだよ。(女・明中→筆者。南洋諸島への八丈
移民の戦時中の苦労話から)

ハー ヨッバラッタ。

もう酔っぱらった。(女・明中。老人会で)

ワガエノ オカーサンガ, ヘータイサンガ ウチー ハリコンダ

トキ₁ニー……

我家のお母さんが, 兵隊さんが家へ入ってきた時に……(女・明中
→筆者。戦時中に陸軍の兵隊が樫立の家々に駐屯しにきた当時の話)

タロァ

コノマエ マタ アッテ ハナショー シタロァ ガ。

この前, また会って話をしましたが。(M→T)

タラ・ラ

イトーデ タシカ キータト オミータ シタララ。

伊東で確か聞いたと思いましたっけ。(T→M。終戦直後の頃の思い出)

オ^フ コ^ロカラ ソ^グッ^ン イ^エバ ヨ^ウラ^ララ ノ^ァ。^ノ

あの頃からそう言えば「体が」弱りましたね。(男・昭初→同)

タッ・タ

ハ^ジメ^テ ワ^ラ ヘ^ータイ^ニ テ^レン^シタ^ッタ。

〔その時〕始めて、私は兵隊に嘘をついたっけ。(女・明後→女・明中。戦時中の思い出)

タッ・タロー

ア^ント シ^タタ^ッタ^{ロー}。^ノ ロ^クマ^ク。

〔その病気は〕何と言ったろう？ 肋膜炎。(女・明後→女・明中。かなり以前のことについて自問し、自答している)

タロー (交替形としてッタロー)

ア^ッデ ア^スコ^オ テ^ッポ^ーバ^テ イ^ッタ^{ロー}。^ノ

何であそこを鉄砲場って言ったろう？ (女・大→女・明中。鉄砲場については第1章19頁参照)

フ^ミコ^ガ キ^ャー^タロー カ^ー。

文子が帰ったのだろうか？ (女・明中→女・明後)

タン

ド^ッキ^ー イ^レタ^カ マ^ジラ^カシ^タン^ニャ^ニ。^ノ

どこへ入れたか、なくしたのかなあ。(女・明後→女・明中。父の日記が見つからないと嘆く)

ワ^ルケ コ^ト シ^タン^ヌー ジャ、ソ^グッ^ン、ム^カシ^ニ。^ノ

悪いことをしたんだろうよ、そのように、昔。(女・明中→女・明後)

タレ (タラレとも)

ソ^イデ^カ ス^グ コ^ッチャ^ン キ^タレ。

〔そこの家は忙しそうだったので〕それですぐこっちへ来ました。(女・大→女・明中)〈先行要素カに呼応しレ結びとなっている〉

シ^タラ^レド^ーニ ア^ーニ^モ ア^ニモ^ー。

〔公用手間につけて貰えると〕言ったけれども、何も、何も〔つけ

て貰えなかった]。(M→T)〈シタレドーなどとも言う〉

タロー（シタローと無活用助詞オ《を》との融合形）

ツノズキヨ テッポーバデ シタロー オビータンヌー ジャ、オメ
チャーモ。

牛相撲を鉄砲場でしたのを知っていらっしやるでしょうね、お母さんも。(女・大→女・明中。娘が母に尋ねているので、オメチャーモは、「お母さんも」と訳した。)

タケ《希望》

タケは動詞に後接され、形容詞と同様の活用をする。代表形としては、形容詞と同じくケで終る形を採用する。形容詞と同様の活用なので3例を挙げるにとどめる。

ワレモ チット ハデニ ナッテ ミタケ ジャッテ、ワラッテ
ワラッテー ワラッテー。

私も、〔派手な着物を着て〕ちょっと派手になってみたいよって、笑って、笑って、笑って。(女・明後→女・明中)

アー クリタクナイ、ヒッカカッテ ヒッカカッテ マー。

ああ、繰りたくない、ひっかかって、ひっかかって、まあ。(女・明中→筆者。糸繰りをしながら、独り言のように言う)

ダイタイ コノヘン ダラト ヨー、オシーテ モライタクテ サ、
イッカイ。

だいたいこの辺だと言う、教えて貰いたくてさ、一回。(T→M)

ラレル《(交替形としてレル)》《受身・可能》

タベ・ラレル・バ《食べられれば》、タベ・ラレラ・バ《食べられれば》、タベ・ラレル・ッチー・ヤ《食べられそうだ》、タベ・ラレロ・カ《食べられるか》、タベ・ラレ(レ)・ドーニ《食べられるけれども》、タベ・ラレロ《食べられる(受身命令)》のような活用が可能であるが、実際にはこのう

ちのラレ(またはレ)形が以下のように比較的多く使われるにすぎない。

ハガ ナッケデ テンブラ ストワ マーリガ タベラレヲデ
ミーンナ マクリョ ステテ イヌノガラ モッテ イク ダラ。

歯がなしで、天ぶらすると、罎りが〔固くなって〕食べられないで、みんな罎りを捨てて、犬に〔食べさせるため〕持っていくんだ。

(女・明中→筆者)

マー ジドーシャガ トーッテ トーッテ トーッテ トーッテ,
ココニ イテアラレン ノァノ。ウチガ ユルグ ワ。

まあ、自動車が、どんどん、どんどん通って、ここにいられないね。

家が揺れるよ。(女・明中→筆者)

アサ ノッデ ヒル ノマレンニャー カ。 ミズ シッタテレバ
ノァノ。

朝、飲んで、昼、飲まれないか。水を切ればね。(女・明中→筆者。
筆者が手土産としてあげた昆布茶用の塩昆布を大事に何回も飲もう
という気持ちで言う)

サセル (交替形としてセル) 《使役》

タベ・サセ・ズ《食べさせず》, タベ・サセレ・バ《食べさせれば》, タ
ベ・サセラ・バ《食べさせれば》, タベ・サシ・タラ《食べさせた》, タベ・
サセル・ッチー・ヤ《食べさせるそうだ》, タベ・サセロ・カ《食べさせる
か》, タベ・サセレ・ドーニ《食べさせるけれども》, タベ・サセロ《食べ
させろ》等の活用が可能である。前項のラレル(レル)同様に、自然会話
に現われる頻度は低い。2例を挙げておく。

ウノ コドモニ タベサシタラ, ウクノ ゴチソーヨ。

あの〔＝娘の家の〕子供に食べさせたよ、あそこ〔＝老人会〕のご
馳走を。(女・明中→筆者。老人会で食べなかった折詰を持ち返っ
て孫に食べさせたということ)。

ダレカ ホカノ ヒトニ クラセレバ ヨッィキャ。

誰か外の人に頼らせればいいんだよ。(女・明中→筆者。糸繰りを
頼まれすぎて、大変だという気持ち)

ギーナラ (ギナラ・ギエナラ・ゲナラ・ゲーナラとも) 《不確かな断定》

言い切りの形である～ナラが最も多く用いられる。機能名詞のゲと活用
助詞ナルとの結合とみるよりは、熟成した活用助詞とした方が使用の実際
にかなっていると考えられる。収録し得た活用成態とそれを含む文例を若
干挙げておく。

ケッコー ジョーブダリギナラ 'ヨ。

結構丈夫そうだよ。(女・明後→女・明後)

ゼンゼン ヒカスララッテ スギーナラ。

ぜんぜん忘れてしまったと言っているようです。(T→M)

オノ オカーサンノ シトガ ジッテダリゲナラン フ。

あのお母さんの夫が律儀のようだね。(女・明後→女・明中)

タノモオジサンガ オメヤーカラ キキヤットチー デンワシテ
ゴージャライギーノァ ーガー。

頼母おじさんが、あなたからお聞きになってから、電話してごらん
のようでしたが。(T→M)

ホッカイドーノ シトダト ユー コトモ アニモ ゼンブ ボーシニ
カケテアラリゲノァイテ、ミンナ。ワカラリゲナララ。

北海道の人だということも何も、全部帽子に書いてあるようだった
ので、みんな。わかったようだった。(M→T)

マンカラ フビテ ロクジュー マデダカ ダラリギエナルッチエー
ヤ ノァ。

今から〔定年が〕延びて60歳までだからしいそうだね。(女・明後
→女・明中)

ソーダ《伝聞》

動詞の代表形、活用助詞のダラのダ形、タのタ形、形容詞の～イ形等に
後接される。活用助詞ダラと同様な活用を示すものと理論上は考えられる
が、実際には活用形は限定されているようである。前述の伝聞表示の無活
用助詞ッチーの頻用に比べ、伝聞のソーダを使用した文例は少ない。

ムジンデ マルダオレニ ナル ソーダジャ。

無尽で丸倒れになるそうだよ。(女・明中←筆者)

ある教示者(女・明中)は、アスワ アメダソーダ。《明日は雨だそう
だ》と言った後、アダニ トーキョーコトバニ ナロイテ ノァ《やっぱり
東京言葉になるからね》という感想を述べている。土地の人同士の間で
もソーダを用いている場合があることはあるが、極めて少ないのは、やは
りまだなじめない共通語の表現であると受けとめられる傾向が残っている
からであろう。

ソーダラ《様態・推量》

形容詞の原語幹・形名詞に後接されて様態を表示し、動詞の -i/-e 形
に後接されてて切迫的事態の推量を表示する。活用形は、活用助詞ダラに

準ずる。活用例を若干示しておこう。

オトナシ^xソード^xァ シト^xダラ ノァ^ノ。

おとなしそうな人だねえ。(男・昭初→女・明中。筆者についての人物批評。)

コッチワ ワルソード^ニ アッチワ ウマカッチ^ー ヤ。ウマソー^[m:maso:]ダラ。

こっち【の蜜柑】は悪そうだけれども、あっちはうまいそうだ。うまそうだ。(女・明中。例文として言う)

モー ハヤ ハナ^モ カレ^テ オテソード^ダ。

もう、はや、花も枯れて落ちそうだ。(女・明中。例文として言う)
〈オテリギエナラでもよいと言う〉

ラシー《推量》

動詞・名詞・形容詞・名形詞・形副詞・名副詞・活用助詞タラ、等に後接し、形容詞に準ずる活用をする可能性があると思われるが、タに後接した次の2例を得たのみで、伝聞のソーダと同様、島言葉への根づきはまだ浅いのであろうか。

ヨッタ ラシー ヨ。

酔ったらしいよ。(男・明後→筆者。老人会で)

ダレカ ノァ^ノ ヘータイ^ニ ハナシ^xテ ソノ ヘータイ^オ プタシ^xタ
ラシー ジャニ^ノ。

誰かがね、兵隊に話して、[盗みをした]兵隊をぶたせたらしいよ。
(女・明後→女・明中。戦時中の思い出話)

12. 文 末 詞

通常、文末に置かれ、文全体のしめくくりをし、聞き手への訴え、話者の情意の表示等をする無活用詞である。

ノァ《ね・な》(ノ、ノー、ヌーに近い発音も時に聞かれる)

ほとんどすべての文末・文節末に置き得る最も頻用される文末詞である。上昇のイントネーションとともに発せられる場合が多い。確認・相槌の請求・疑問の投げかけ・共感の表示と請求、等、ノァの表示内容は極めて豊かである。若干の例を挙げる。

ジュンサワ ノァ、ダレ ダッタ カ。

巡査はね、誰だったか。(M→T)〈このノァは間埋めの機能とともに、聞き手に次の発言に対して注意を向けさせようとする機能もある〉

マダ マルビンノァ ウチニ ソコニ オジャッタダ ノァ。(あー)

まだ死なないうちにそこにおいでだったんだね。(M→T。共感・同意を求めているノァ。聞き手は“あー[A:]”と相槌を打っている)

ソイデ オメヤーシャー、ガー アスコエワ ハチマンヤメヤー ウメヤリ ノァ。

それで、あなたがたが、あそこへは、八幡山へお埋めになったのですね？(T→M)〈疑問の投げかけ〉

ジャ《よ・ね》

ノァに次いで頻用される。ジャはノァほどには訴える力を持たない反面、自己主張の面がそれだけ強く出てくる場合が多い。動詞の—o/—u/oã 語幹、形容詞の〜ケ形・活用助詞ダラのドァ・ダロァ形、活用助詞タラのタ形、推量助詞ヌー、伝聞助詞ッチャー、等々の後に置かれる。

ゲンキダイドン ダーメデ オジャル ジャー。

元気ですけども、[こう年をとっては]駄目でございますよ。(男・明中→筆者)

イマデ ユート キャラメルカ アニカノ ワケドァ ジャ ノァ。

今で言うとかキャラメルか何かの訳なんだよね。(女・明中→女・大。子供の頃、キミガンシャ《砂糖きび》をかじりながらツノズキ《牛相撲》を見物したことを話している。)

オー。ソグワンダランヌー ジャ。

ああ、そうだろうね。(M→T)

コブチョア ハジメテ ノモ ワ ジャ。

〔私は〕昆布茶を始めて飲むよ。(女・明中→筆者)

オミヤーワ ゴージャロァ ジャー。

あなたはごらんになりましたでしょ。(女・明中。筆者への説明のための例文として)〈話者と聞き手が共にあるものを見た覚えがある時にこういう〉

オマ^ーワ ヨ^ケ ヨメ^サン モチ^ヤロ^ァ ジャ^ニノ。ワ^ーワ。

あなたは良い嫁さんを持ったねえ。ほんとうに。(女・明中→筆者)
ワ《よ》(共通語訳では強いて文末詞をつけない方が適切な場合が多い)

話者の行為を示す動詞の—o 形の後に置かれれば、話者の意志を示す。
その他の場合は発言についての確信を示す。推量の助詞ヌーの後にもよく
置かれるが、推量に対する確信を示している。

ワガ ショ^ー ワ。

私がします。(女・明中→女・明後)

ジ[○]サツ ダランヌー ワ。

自殺だろう。(T→M)

シ[×]トガ キ[○]タラバ オ^キャクニモ ノマセテ ミ[○]ロ ワ, イツ[○]カ。

人が来たらば、お客にも飲ませてみるよ、いつか。(女・明中→筆者。筆者が土産にあげた昆布茶を人にも飲ませるということ)

シマザケワ ウマク オジャロ 'ワ。

島酒はおいしゅうございます。(女・明中。老人会で筆者のそう言
いたい気持ちを察して教えてくれる)

ガ(ガイとも。親しみと情愛をこめて言う場合)《が》(共通語訳では、文
末詞をつけない方がよい場合も多い)

ジャ・ワ等と同様に頻用される。発言を控え目にする効果があるので
いねいという印象を与える場合が多い。動詞の—u/—o/—o^h 形・形容詞
の~ケ形・活用助詞ダラのド^ァ形・タラのト^ァ形, 助詞ヌー, ッチー等の
後に置かれる。

ソ^ンチョーサン[、]ワ^ー ドー^ージュセン^{シエ^ー} ダラ^ッケット オ^モー
[、]ガ^ー。

〔その当時の〕村長さんは道寿先生だったかと思うが。(M→T)

シ[×]ッカリ ヤ^ンノー[、]ト^ー タイ^ヘンド^ァテ オ^{ジャ}ル 'ガ^イ。

しっかり〔老人会の会長として〕やらないと大変なんでございませ
よう。(男・明中→筆者)〈親しみとていねいさがイの添加によって
示される〉

コ^ノマエ マ^タ ア^ッテ ハ^ナショ^ー シ^タロ^ァ ガ^ー。

この前、また会って話をしました。(T→M)

セーミサンガ ジドーシャデ コノメヤーワ イカラロァ ガ。

せいみさんの自動車でこの前は行きました。（女・明後→女・明中）

ハラ ニジューネン イジョーン ナンヌー ガニ。

もう20年以上になるだろう。（M→T）

ヨ（ヨーイとも。親しさが表わされる）《よ》

活用詞の言い切り形・文末詞ワの後など、駄目押しのにつけ加えられ、自己の主張を強める機能を持つ。したがって下降イントネーションがかぶされることが多い。

コリャ ワガジャ ナッキャ ヨー。

これは私ではないよ。（女・明後→女・明中）

ハナ ムラッテ イコワ ヨーイ。

花を貰っていくよ。（女・大→男，女・昭初）

オラー ヨワーグワン ダララ ヨー。

あの人は酔ったようだったよ。（男・昭初。筆者への説明の例文として）

コフヘン ダラト ヨー オシーテ モライタクテ サ、イッカイ。

この辺だとうよう、教えて貰いたくてさ、1回。（T→M）〈相手が言う」と予想される引用文を強調している例〉

サ《さ》

活用詞に後接される助詞テ（交替形デ）・同じくシ、活用助詞ダラのデ形、連体詞、文末詞ガ、等の後に置かれる。間埋め的な効果・聞き手の注意を向けさせる効果、等がある。文末よりも文中の段落末、文節末に多く用いられることが多い。

……ハカミャーリニモ イッテ サー。 アノ サ、 ソノ ウメテ
タモーロァ トコロリー。

……墓参りにも行ってさ。あのさ、その埋めてくださった所へ。

（T→M）

ウチー イレトァ ワケジャ ナシ サ、 ソノ コツー ワ。

家へ入れた訳ではないしさ、そのお骨は。（M→T）

ドー、セー マー カンタンナ オガミ ダランヌー ガ サ。

どうせ、まあ、簡単なお経だろうがさ。(M→T)

ゾ《ぞ》

自己の主張・確認事実、等を強調する。

アル ゾ, ココニ シッカリ。

あるぞ、ここに沢山。(男・昭初。筆者への説明のための例文)

ゾを使った文例は上の1例のみであったので、この例文の提供者に確めたところ、島言葉としてもゾはよく使うという答を得た。

カ《か》

疑問を表す。動詞の—o/—w/—oã 形、形容詞の～ケ形・～イ形、活用助詞ダラのドァ形、同じくタラのトァ/タ形、名詞、等の後に置かれる。

ハシガ アロ カ。

箸があるか。(女・明後→女・明中。老人会で)

オミワ ワシトァ カ。

お前は行ったか。(男・昭初→男・昭初)

カゾクノ シトオデモ ツッテ オジャル カ, ドーダ カ。

家族の人をでも連れていらっしゃるかどうだか。(M→T。聞き手に向けられた質問ではなく、話しての心のうちの疑問を自問風に表現したもの)

カは、不定表示の機能を持つこともできる。この場合は、無活用助詞へ歩み寄ったものと考えられる。

ドァガ ソノ コツワ マトメテカ 'アルダロー ガニ アッデモーフ。

だが、その骨はまとめてかしてあるだろう、なにがなんでも。(M→T)

ダレカ キットー サイゴノ スガトァ デモ ミタ カー。

誰かきつと最後の姿をでも見たか。(T→M)〈ダレカのカは無活用助詞として不定を表示し、文末のカーは文末詞として、話者の疑念を自問風に表現している〉

ヤ《か》

カと同様に疑問を表示する点は共通しているが、動詞との接続関係に違いが見られる。すなわち、カにおいては、—o/—w/—oã 形に接続するが、ヤにおいては、—i 形に接続する。言及される時間は文脈か場面によって

決まる。

アニョ サガシ ヤ。

何を探しているのかい。(女・明中→筆者)〈現在〉

キルイノ ウグワン^ノド^ノァ^ノモノ ソノママ オジャリ^ノ ヤ。

衣類のようなものがそのままございましたか。(T→M)〈過去〉

オビノ ハバワ ヒロケ ヤ, セマケ ヤ。

帯の幅は広いか, 狭いか。(女・明中→男・昭初)〈現在〉

ダレ。フミコ ヤ。ヨン^ノジュ^ノーダンヌ, ハ^ノラー。

誰? 文子かい? 40歳だろう, もう。(女・明中→筆者の妻。「娘さんは若く見えますね」と言われて)〈現在〉

ダレカ ヤ。ダレ^ノダ^ノロー。

誰かな。誰だろう? (女・明中→筆者。筆者に「誰か訪ねて来た」と言われて)〈現在〉

ヤ《よ》

話者にとって明白なことを確信をもって言う時に用いられる。動詞と形容詞の接続する形が疑問のヤと異なっている。動詞は —u 形の場合が2例, 形容詞は語幹の場合が1例得られている。

カオガ フクレテ アルカラ ホーガ フクレテ アル ヤ。

顔が腫れているから頬がふくれているんだよ。(女・明中→筆者夫婦。ある病気の人についての話)

マサカズガ トリイク ヤ, アッデ^ノモー。

雅一の〔酒〕を取りに行くよ, 何が何でも。(女・明中→筆者。内地にいる娘の婿が来ると, 酒好きなので, 隣に住んでいるもう一人の娘婿の家へ酒を貰いに行く, ということ)

ミ^ノエー アラッタリ, ミ^ノエー。サケ^ノデー ミ^ノエー アロート ウレシヤ。

目を洗ったり, 目を。島酒で目を洗うと〔目が疲れて痛いのが〕治るよ。(女・明中→筆者)

ソノ ユルワ ネラレンジャラッチー ヤ。ヤメテ。

その夜は眠れなかったそうですよ。痛んで。(女・明後→女・明中)

〈ヤは伝聞の助詞ッチーの後で頻用される〉

シ

否定的内容を反語的に肯定で表現する時に用いられる。次の4例を得た。

「シャーキンガ アッテモ アーンダロ^シ……」

〔あその人は〕借金があったって何だい〔何でもないさ、と言って平気だよ〕。(女・明中→筆者)

「オランシャーガ オビー シー。」

あの人たちが知っているものですか〔知らないさ〕。(男・昭初。筆者への説明のための例文として言う)

「アニシ カモワ シ。」

なに構うものか〔構やしないさ〕。(男・大→女・大。筆者が傍においたテープレコーダーなど気にしないでどんどんしゃべろう、ということ)

「ワー ソグランドァ ボロオ ハジガマシク アダンシテ キテ コノ
ミチョ ミカレー シー。」

わあ、そんなぼろを、恥ずかしく、どうして着てこの道を歩けるものか〔歩けやしない〕。(男・明中。筆者への説明のための例文として)

カレ

自信ある主張・断定を示す。相手の発言を正す際などにも用いられる。カ+アレが融合しさらに1語詞としての文末詞に熟成したものであろう。現在の話者たちは、カ+アレの分析意識を持っていない。活用助詞ダラのデ形、または形容詞の〜クテの活用成態の後に置かれている数例を得た。

「フトロ^カァ シトワ ワガ コドモデ カレレー。」

太った人は私の子供だよ。(女・明中→筆者。筆者が感違いしていたことを正す時の発言)

「ムカーシノ イトダラ、コレ、ワー イマワ コレデ カレ。」

昔の糸だ、これは。今は、これだよ。(女・明中→筆者の妻。昔の生糸と対比してやや強調して言う)

A: 「ワガ カオワ アカーク ホデッテア^カロ カー。ア^カンダカ キワ

- ンガ ワル^クテ^ー。
 B: ヤー。オメ^ャーガ カオワ シロ^クテ カレ ヨ^ー。
 A: 私の顔は赤くほてっているかい。なんだか気分が悪くて。
 B: いや、あなたの顔は白いよ。
 (男・昭初。筆者への説明のための例文として)

13. 接 続 詞

文頭あるいは文中におかれ、継起する文と文との連関・文の部分と部分との連関・話者交代の際の連関をつける機能を有する語詞を接 続 詞 と呼ぶ。多くは2つ以上の要素に分析可能のものが多く、接続詞としてとらえた場合は熟成した1語詞とみなす。実際の文例は第5章の自然会話を通覧することによって得られるので、ここでは文例を示さず、接続詞を列挙するにとどめる。

モシ《もし》条件提示の先駆的機能を果す。

マゲン《いや》前言を否定し、後に言いなおしの文または文の一部が続くことを表示する。

ソイデ (ソンデ・ンデ [nde] 等とも)《それで》順接表示。前行部が理由で後続部がその結果であることを示す場合もある。

ソイカラ (アカラ [əkara] 等)《それから》順接表示。時に話題の転機を表示。

ソイジャー《それじゃあ》相手の発言を根拠に自己の見解なり疑問なりを表現する文を始める。また、対話の打切りになる文が続くことを表示する。

ドット《だと[すると]》相手の発言に基づいて自己の見解なり疑問なりを表現する文を始める。

ドイテ (ドイテ, ソウンドイテ, ソンドイテ, 等)《だから・そうだから》相手の発言を含め先行部を発言の根拠とする後続部を導く。

ストア《すると》先行部から後続部への事態の展開などを表示。

ドッガ《だが》逆接表示。

ダイドー (ダレドー・タイドン・ダレドモ, ダドン等)《だけど》譲歩的接の表示。

ソイデモ《それでも》譲歩的接続の表示。

オイデモ《あれでも》譲歩的接続の表示。

イエバ《つまり・言いかえれば・言わば》言い替え・敷衍説明等が後に続くことを示す。

14. 間投詞

引用部で用いられる場合を除き、常に1語文として用いられる語詞を間投詞と呼ぶ。二つ以上の要素に分析可能のものがあっても熟成しているものとし1語扱いとする。収録した間投詞を以下に列挙する。

オー 《はい・そうだ》相手の質問内容に対して肯定の返事をする場合・相手の発言をその通りと容認する場合・相手の申出を応諾する場合・相槌、等使用範囲は広い。イントネーションによって表現ニュアンスが表わされる。

オー。 もっとも多いイント型である。《ええ、そうです》《はい、そうです》

オー^ノ。びっくりした相槌。《へえー、そうですか》

オー^ノ。 } オーとほぼ同じであるが、いくらか軽快。《ええ、そう》
 オー。 } 《はい、そう》

オー(ー)。 感心した応答《ほう、そうですか》。または、確信をもった応諾《おお、もちろん》

オー。 オー。 思い出して自己確認するような場合°《そう、そう》

以上の他に変種として、軽い応諾を表すオイ。《ああ》と、大変な驚きを伴った応答オー^ア。《うへーっ、そうかい》とが聞かれた。

オソ (時にウソとも) 《いいえ・いや・違います》相手の質問や発言の内容が事実と反すると認めた場合の返答として頻用される。オソ^ノ, オソ^共に用いられるが表現ニュアンスの違いはないようである。

ヤ, ヤー 《ええ、何と言いましたか》相手の質問・発言がよく聞きとれなかった場合、よく聞きとれても突然呼びかけられたり、話題が変わってなぜそういうことを自分に言ったか理解できない場合の、聞き返しに頻用される。上昇調で発せられ、ヤッ [ja?], ヤー, ヤー^ノ などとなる。

ヤー 《いえ、そんなことはないですよ》オソの表現内容と似ているが、オ

ソほどは頻用されていない。男・昭初において数例を得た。首を横に振りながら ヤー オソダラ。《いや違う》とよくいう。

エー [e:] [e:] [ē:] [e·?] など音声の具体相は多様である。《もちろんそうだと》、《こうなったからにはどうでもよい》、《いいたいぜんたい》などを表現するが、おどけた気持・やけっぱちな気持などを伴っての発言の場合もある。頻用されるものではない。男が用い、品は低いようである。

ワー (ワ) [wa:] [wa?] [Ma:] [Ma:] [βa:] [wɔ:] [wɔ?] 等、具体音相は様々であるが、[wa:] が最も安定した基本のものと考えられる。イントネーションは高平調がもっとも普通であるが、低平調・上昇調・下降調もあり、驚きの気持のニュアンスがイント型に応じて表現される。男性も用いるが、女性に頻用される。1例を挙げておく。

ナニョ ツケテ アガル。 マイネーズ 'カー。 サトー 'カー。
シオー。 'ワッ。 'シオ 'カー。 ソワン ダメー。

何をつけてあがる? マヨネーズかい。砂糖かい。塩〔をつけるって〕!? まあ、塩かい。そうは〔私は〕駄目。(女・明中→筆者の妻。サツマの空揚げに塩をつけて食べると聞いてびっくりする)

ワーワーと続けて発することも多い。

アー (アッ) [a:] [ʔa:] [a?] [a·?] 等の具体音相を示し平坦・上昇・下降のイントがかけられる。気づき・相槌・驚き・感じ入り・軽い別れの気持ち (アー。ソイジャ。のような場合) などを表現する。

オッ [ɔ?] おどけて、びっくりしてみせるような場合に使われた例を得た。

アウ (アーウー) [au?] [i̯a:u:] [x̥aũ /] 等の具体音相を示す。「もういいかげんにしてくれ」というような不快感を表現する。

アイ、アエ、ヤイ等の組合わせと繰り返しによって驚き・同情などの気持が表現される。イントもさまざまで感情の強弱の差が表現される。数例を挙げる。

アイヤッ 《[あんな高い石段を登るとは]ひゃーっ。そりゃ大変》

アイアイアエー 《[こんなに沢山魚が集ったとは]こりゃあなんとまあ》例えば釣をしながら

アイヤイヤイ 《まあまあ、悪いことは出来ないものだねえ》

アーイヤイヤイ ムギーコトニ アフシトガ ノーフ 《なんてまあ、
むごいことにあの人が〔交通事故で怪我をするとは〕》

オイ 《おい》呼掛け。同輩・目下へ。

コラッ 《こら》おどしの呼びかけ。

オノノァ 《あのね》呼びかけ。オノノァと上昇調が用いられ訴えかけの気持ち
持ちが表わされる。

ンド [ndo] 《ほら》注意喚起。ンド。ンド。《ほら、ほら》と繰返すこと
が多い。1例を挙げれば、ボス、フー、ンド。《ボス猫が入って来たよ、
ほら》(男・昭初)

ドッケイショ／ドッコイショ／ヨイショ、等重い者を持上げる時、立上る
時、高い段を上る時などの掛声。

キビガワリー／キビナワリー 人から物を貰った時、人の勤勉さに感心し
た場合、等に発せられる。《ほんとにまあすみません》《ほんとにまあご
精が出ますね》など、用いられる場面は多い。

オカゲサマ／オカゲサマデ 謝辞として頻用される。

アバ／アバヨイ／アバヨーイ 別れのあいさつ。

ウシメ 《牛》への号令としての間投詞に次の二つがある。

トイ 叩きながらこういうと、止っている牛が歩み出す。

ビヤ(一) 歩いている牛を止める場合とか、暴れている牛を静める場合に
使う。

15. 間 埋 詞

間埋め音については既に述べたが、ここでは明瞭な生活語音をもって発
せられる間埋めの機能を持つ語詞をとりあげる。他の詞類から転用された
ものと見られるものや、2つ以上の要素に分析可能のものもあるが、機能
上独立の1詞類に属するものとして取扱う。以上に収録し得た間埋め詞を
挙げる。

アノ／アノー／オノ；ソノ／ソノー；ソイデ／ンデ[nde]／ソイカラ；
マー；ト；オイドァ、等。

これらの間埋詞と前述の間埋め音の使用される実態は、第2章の自然会
話を通覧することによって理解できることと思う。

第5章 若干の表現法について

この章では、前章でとりあげなかった表現法、あるいはとりあげたが不十分であった表現法について補足しておきたい。

1. 日常社交表現

人名を用いた呼びかけ

○男への呼びかけ

年齢が話者よりもかなり上の場合

タノモオジサン	《頼母おじさん》
サワノスケオジサン	《沢之助おじさん》
カツラオジサン	《桂おじさん》

のように名の後にオジサンをつけて呼ぶ。

年齢が話者よりやや上の場合

トシサダアンチャン	《敏貞あんちゃん》
ヨシミツアンチャン	《義光あんちゃん》
トミトシアンチャン	《富敏あんちゃん》
ハチスケアニー	《八助兄》
ソーハチアニー	《惣八兄》
マサミアニー	《正身兄》
トメキチアシエ／～シー	《留吉吾兄》
カッタサン	《勝太さん》

のように名の後にアンチャン、アニー、アシエ／アシー、サンをつけて呼ぶ。アシエ／アシーは廃語になりつつあるようである。

年齢が同等か同等以下

タカテル	《和昭》
カツヤ	《勝哉》
タケイチクン	《武一君》
ヨシハルクン	《義治君》

のように呼び捨てが多い。クンをつけると親しみが薄れるという人もいる。

○女への呼びかけ

年齢が話者よりもかなり上の場合

オモトオバサン 《おもとおばさん》

サトルオバサン 《さとるおばさん》

のようにオバサンをつけて呼ぶ。

年齢が話者よりもやや上の場合

オミサアンド 《おみさねえさん》

ツネアンド 《つねねえさん》

ヒサノサン 《ひさのさん》

のようにアンドかサンをつけて呼ぶ。今はサンをつけることが多く
なったという。

年齢が話者と同等か下の場合

ヒサノ 《ひさの》

ヤチヨ 《八千代》

ィエイコサン 《栄子さん》

のように呼び捨てか、サンをつけて呼ぶ。

(文例)

タケア二、ウチャーレ。

武一兄、歌ってください。(男・老。老人会で)

オモトオバサン ヨ、ウチャーレ。

おもとおばさんよ、歌ってください。(男・老。老人会で)

ホカニ ツカイミチモ ナイカ ノァノ サトルアンド。

外に使い道もないかね、さとるねえさん。(女・老。老人会で)

○その他の場合

学校の先生のうち、八丈島出身の先生については、名にセンセー（古くはセンシエ／センシーとも）をつけ、島外出身の先生については苗字にセンセーをつけて呼ぶのが普通である。

ヒロコセンセー 《弘子先生》(島内出身)

モリヤセンセー 《守弥先生》(島内出身)

ヒライセンセー 《平井先生》(島外出身)

島外よりの来訪者は、苗字にサンをつけて呼ぶのが普通である。

ドノ《殿》も使われるが、相手に直接呼びかける例は採録し得なかった。ドノは第三者の同等ないし目下の苗字でなく名前に接尾される。

人家を訪ねた時のやりとり

○訪問者のことば

最も丁寧

オジャリヤロ カー。(口をルとも)

おいででいらっしゃいますか。

丁寧ないし普通

オジャロ カーイ。(口をルとも)

おられますか。

ダレカ オジャロ カー。(口をルとも)

誰かおられますか。

ダレモ オジャリンナカー。

誰もおられませんか。

ダレモ オジャリノー カー。

誰もおられませんか。

オジャル。

いらっしゃる?

ざくばらん

アロ カー。ダレカ アロ カー。

いますか。誰かいますか。

最もざくばらん (対等ないし目下へ)

ワソ カーイ。

いるかい。

その他、現在は使われなくなったが、他家への訪問時のあいさつ表現として、

オリヨー。

がある。「おはようございます」「こんにちは」としても使えるものであったという。

○家人の応答

最も丁寧

オジャリヤッタ カー。ウチー ヒャーッテ タモーリ ヤレ。

おいでになられましたか。家へお入りください。

丁寧

オジャッタ カー。ウチー ヒャーリ ヤレ。

おいでになりましたか。家に入ってください。

オジャロ　ワー。　アガリ　ヤレー。

おりますよ。あがってください。

オー。アロ　ワー。ウチー　ヒャーレ。

はい。いますよ。家へ入りなさい。／ああいるよ。家へ入れ。

この後、訪ねてきた人が、他地区の人で久しぶりの来訪であったとすれば、

'ワー ヘーテーブリドァ 'ジャー。

わあ。久しぶりだねえ。(女・明中→女・明後)

と言って喜ぶ。

路上での相手の確認と応答

オーイ。ダイドァ。

おーイ。誰だい。(ぞんざい)

オミヤーフ ダレドァ。

あなたは誰だい。(やや丁寧)

オミワ ダレドァ。

おまえは誰だい。(子供などへ)

オミャーワ ダレデ オジャロ カ。

あなたはどなたでいらっしゃいますか。(丁寧)

こう呼びかけられた人は、後を振り返って次のように応答する。

オ。ワイダラー。オ。ワレダラー。

ああ、私だ。ああ、私です。

更に、呼びかけた人は相手が誰とわかって次のように言う。

ワ。オミヤー カ。

ああ。あなたですか。

ワ。オミ カ。

ああ。おまえか。

路上での声掛け・家から路の人への声掛け。

ヤスミ　　カー。ドキー　　オジャール。

「今日は仕事が」休みか。どこへお出かけ？（ぎっくばらん）

ヨリ ヤレー。／トーリ ヤレー。

〔私の家に〕寄ってください。(丁寧)

よその家を辞去するときのやりとり。

ハラ キャーロ ワ。ヒエーチエー アスッデー。

もう帰ります。長いこと遊んで。(普通。アスッデーは「おじゃまして」に相当)

ハヤ キャーロ ワ。マン ウチデ イソガシケイテ。

もう帰ります。今、家で忙しいので。(普通)

ハヤ キャーランニヤダラ。ヒエーチエー アスポアイテ。

もう帰らなくては。長いこと遊んだから。(普通)

のような発言を来訪者がすると、家の人は次のように言う。

ハヤ キャーリ ヤロ カー。マツト アソベバ。

もうお帰りですか。もっと遊んだら。(丁寧。アソベバは「ゆっくりしていったら」に相当)

キャーロ カ。／ハー カエル。

帰るのかい。(ぞんざい)

こうしたやりとりの後、来訪者と家人の間で次のように言い合う。

ソイジャー。

それでは。(ぞんざい)

アバヨーイ。

さようなら。(長期に別れる時に多く用いられる。25頁参照)

アバ。アバ。

あば。あば。(ぞんざい・ざっくばらん)

ヒッカスルナ ヨー。

〔私のことを〕忘れるなよ。(長の別れの時。25頁参照)

ヒッカシンナカ。

忘れませんよ。(ヒッカスルナ ヨー。への応答)

オモーワ ヨーイ。

〔あなたのことを〕思うよ。(長の別れの時。25頁参照)

ヌー オジャレ ヨーイ。

またおいでください。(ていねい)

仕事の人への別れ。

ガマンシ ヤレ ヨーイ。

頑張ってくださいよ。(ていねい)

路上で立話の後の別れ。

ワセ ヤーイ ワリャ コッチー キャーロン, オミワ ムコーシャン
ワセ ヨーイ。

行きなさいよ。私はこっちへ帰るが、おまえは向こうの方へ行きなさい。(対等または目下へ)

謝辞

オカゲサマ。／オカゲサマ、デー。

お蔭様。お蔭様で。(アリガトーは聞かれない。これらが、日常のごく普通の謝辞である)

ドモ、ドーモ。

ども、どうも。(簡略)

ソラ ドーモ。

それはどうも。(簡略)

ドーモ オカゲサマ、デー。

どうもお蔭様で。(丁寧)

ワザワザ ドーモ オカゲサマ、デ。

わざわざどうもお蔭様で。(丁寧)

クワン シッカリ タモッテ ウレシキヤ。

こんなに沢山もらって嬉しいですよ。(丁寧。タモッテの代りにムラッテ《貰って》を用いると、対等または目下への言い方となる)

こう言われた人は次のように言う。

ソレダケ グリャー ヨー。

それだけばかりでよう [お礼など言われたら恐縮です]。(普通)

もてなしのお礼は次のようになる。

オゴッソーサマニ ナッテ。オカゲサマー。

ご馳走様になって。ありがとうございます。(丁寧)

そう言われたもてなし側は、

オカマイ ナシデ。アンニモ アゲモ シェズ。

お構いなしで。何も差上げず。(丁寧)
と応ずる。

朝の挨拶

オヤスミ ヤッタ カー。

お休みになられましたか。(最も丁寧)

ヤスミ ヤッタ カー。

休まれましたか。(丁寧)

オヨリ ヤッタ カー。

休みましたか。(同輩へ。普通)

ヤドリヤロァ カー。

寝ましたか。(同輩へ。普通)

ヤドロァ カー。

寝たかい。(同輩目下へ。ぞんざい)

オキテ オジャロ カー。

起きておいでですか。(丁寧)

オキ ヤッタ カ。

起きられましたか。(丁寧)

ハヤ オキトァ カ二ノ。

もう起きたか。(同輩：目下へ。ぞんざい)

以上の表現に対しての応答は、普通次の通りである。

オーノ オキタ_二ラー。

ああ、起きましたよ。

なお、共通語の影響によると思われるものとして次のものが聞かれた。

オハヨーゴザンス。(男・明→男・昭初)

就寝時頃訪ねた際の挨拶

ハヤ ヤスミ ヤロ カー。

もうお休みになりますか。(丁寧)

ハラ オヨリ ヤル。

もう休まれますか。(丁寧)

ハラ オヨリ ヤロ カー。

もう休まれますか。(丁寧)

ハラ ヤドリ ヤロ カ。

もう寝られますか。(やや丁寧)

ハラ ヤドロ カ。

もう寝るかい。(ぞんざい)

ワ— ヤドロ カー。

[wa:]

わあー。寝るの? (ぞんざい。ざっくりばらん。ごく親しくしている人の家の戸をいきなり明け、家人が寝ようとしているところを見て、びっくりするような場合)

以上のような発言に対して、家の人は次のように応答する。

オー。ハラ ネロ ワ。

ええ。もう寝ます。(ワの代りにガを使ってもよい。ガの方がワよりも当りがやわらかい。ワをつけずにネロで言い切ることもできるが、ワをつけた場合よりぶしつけでぞんざいな物言いである)

この応答を聞いて訪問者は、あまりに早い時刻であった場合、次のように言う。

ワ—, ワ—。ハヤ ソ ワ—。

わー, わー。もう寝るの? (ソは色々な行為を表現し得る動詞である。ここでは「寝る」に相当)

その他、共通語と同様のコンバンワもかなり用いられているようである。

夜の辞去の挨拶

ヤスミ ヤル トー。

お休みなさいませ。(目上へ。丁寧)

ヤスミ ヤレー。

お休みなさい。(目上へ。丁寧)

オヨレ ヨーイ。／オヨッテー。

寝なさいよ。(同輩へ)

天候の挨拶 (寒い朝の場合を例にとり)

キエワ コギエロ ワ。

今日は寒いですね。(目上、同等、目下のいずれに対しても言える)
これに対して、そう言われた相手は次のように応答する。

スグワン^レド^レァ ノ^レァ^ノ。テガ シ^レカジ^レデ^レ。

そうですね。手がかじかんで。（普通）

キ^レエ^レワ チ^レート サ^レム^レキャ ノ^レァ^ノ。

今日はちょっと寒いですね。（普通）

キ^レエ^レワ コ^レギ^レエ^レド^レーニ ガ^レマン^レシ^レテ イ^レコ^レグ^レワン。ロー^レジン^レホ^レーミ^レー
ノ^レァ。

今日はちょっと寒いですが、頑張って行きましょう。老人会会場へ、ね。（普通。ロージンホーミーはロージンホーム《老人会会場〔八丈町役場の檜立出張所の三階にある。いわゆる老人ホームのことではない〕》の方向を示す助詞イ《へ》が融合したもの）

慶弔の挨拶

慶弔の場合、人々は全く改った状況におかれるので、現在では、島人同士であっても共通語を用いるのが普通であるという。たまたま、老人会で金婚式の祝いが行なわれているところに参加させてもらったが、共通語で会長が祝詞を述べ、乾杯の音頭取の人が、

シン^レジ^レト キ^レヨ^レミ^レノ キ^レン^レコ^レン^レシ^レキ^レオ オ^レイ^レワイ^レシ^レテ カ^レン^レパイ。

新次と千代美の金婚式をお祝いして乾杯。（男・明後）

と発声すると、数人の男子が、

カン^レパー^レイ。オ^レメ^レデ^レト^レー。オ^レメ^レデ^レト^レーサ^レマ。

と唱和した。

弔事にも遭遇したが、島外者が言語収録の目的で参列することは不謹慎であるので遠慮した。たまに年寄りの人が、オ^レミ^レャ^レー^レワ カ^レナ^レシ^レク オ^レジ^レャ^レロ ジャ。《あなたは悲しくていらっしゃるね》と言う程度で、通常は共通語の表現になるそうである。

2. 可能表現

可能（不可能）を表現するには、既述の活用助詞ラレル（交替形レル）を動詞に接尾させる方法の外に次の方法がある。

（1）可能動詞デコル（デクルとも）を用いる。

カ^レニ^レェ ゴ^レク^レラ^レキ^レエ シ^レヌ^レト モ^レッ^レテ イ^レグ コ^レト^レワ デ^レコ^レズ。

金を極楽へ、死ぬと持って行くことはできない。（女・明中→筆者）

ゲーデモ ナンデモ デクル, アレモ。

芸でもなんでもできる, あの人も。(男・明中→筆者)

その他の活用成態を示せば, デクナイ/デコナイ《できない》, デクル
ッテ《できるって》, デクノー ジャ《できないよ》, デキンジャンヌー
ジャ《できないだろうよ》。

(2) 機能名詞ホー/ホを用いる。

オドロホ ナイカ。

踊れないか? (男・明後→筆者。老人会で)

ソレガ ヒネルホ ナッケドァ ドアイ, テー。

それが, くず繭をよって糸にできないのだから。(女・明後→女・
明中)

オヤノ ナメヤーモ ヨーホーデー。

〔その幼児は〕親の名前も言えるので。(女・明中→筆者)

カシタテコトバオ ショホーデ。

〔あなたは〕極立言葉を話せて〔いいですね〕(女・明中→筆者)

(3) キルを複合動詞の後部要素として。

オチャモ アニモ ノミキラズニ……。

お茶も何も〔嫌いで〕飲めないで……(女・明中→筆者)

サカシタマデワ イキキラズ。

坂下までは〔遠くてパーマをかけに〕行けない。(女・明後→女・
昭中)

肯定の収録例はない。

3. 必務表現法

ズニャ/ンニャ/ンナ/ンノート/ンノットなどにドァガ/ダラ/ダイ
ドー/ダンヌーワなどを呼応させて結びとする場合が多いが, 呼応部を欠
く場合もある。

ケーサツニ ハナサズニャ ドァガ。

警察に話さなくてはだが〔＝話さなくてはならないが〕(M→T)

オビョー カワズニャ ダンヌー ワ ヨー。

〔八丈織の〕帯を〔東京の親戚へお土産に〕買わなければならない

でしょうよ。（男・昭初→女・明中）

トーキョーカラデモ ムラワンニャー。シマノ ヒトワ ナッケ。

〔樫立の青年たちは〕東京からでも〔嫁を〕貰わなくては。島の人では〔嫁になる人は〕いない。（女・明中→筆者）

トリトワ イワナイ。シトリト インノート。

〔1人のことを〕トリとは言わない。シトリと言わないと〔いけない〕。（女・明中→筆者）

マダ スゴシ ワカサニャ ダイドー。

〔このやかんのお湯は〕まだ少し沸さなくては〔ならないの〕だけど。（女・明中→女・明後。老人会で）

4. 待遇表現

待遇表現については、今までの文例がすでに多くを語っていると思うが、ここに主要点を要約しておく。

（1）2人称指示語の選択によるもの

オメヤー（上）——オミ（中・下）——ウナ／ナレ（下） 以上単数。

オメヤーシャー（上）——オミンシャー（中・下）——ウナンシャー／ナレンシャー（下） 以上混数。

（2）待遇段階表示動詞の選択によるもの

オジャル（上） $\left\{ \begin{array}{l} \text{イク（中・下）} \\ \text{クル（中・下）} \\ \text{アル（中・下）} \end{array} \right\} \begin{array}{l} \text{《行く》} \\ \text{ワス（下）《来る》} \\ \text{《居る》} \end{array}$

ゴージャル（上） $\left\{ \begin{array}{l} \text{ミル（中・下）} \\ \text{マバル（中・下）} \end{array} \right\} \text{《見る》}$

タモール（上）——ケル（中）——タブ（下）《くれる》

オシャル（上） $\left\{ \begin{array}{l} \text{ユー（中・下）} \\ \text{ス（中・下）} \end{array} \right\}$

アガル（上）——メヤール（上・中）——タベル（中）——カム（下）《食べる》

ヤスム（上）——オヨル（中）——ヤドル（下）《寝る》

（3）待遇表示の補助動詞を使用

オジャル／ゴージャル／タモール（上）

動詞の～テ（交替形デ）活用成態の後に置かれる。

ヤル（上）

動詞の —i 形の後に置かれる。

ワス・タブ

動詞の～テ/デ活用成態の後に置かれる。

（４）オジャルによる品位保持の表現

オジャルは相手を尊敬して用いる場合と、相手が目上・対等・目下の別にかかわらず自己の品位保持と丁寧さの表示としても頻用される。ただし、オジャルが《居る・ある》または継続・結果等を表示する補助動詞としての《…している、…してある》に該当する場合のみであって、《行く・来る》に該当する時にはこの用い方はできない。例えば農協でのコボーワ オジャロ カ。《牛蒡はございますか》（女・明中）はこの例である。また、タカテルサン、ココニ オジャロ カーイ。《和昭さん、ここにおいでですか》と声をかけられ、声をかけられた当人が、家の中からオー。オジャロ ワ。ココニカ タコ ツクッテ オジャロ ワー。《ええ、おりますよ。ここで風を作っておりますよ》（以上、男・昭初の筆者への説明のための例文）と答えるのは許される。相手がオジャロを使って尋ねるならば、答える方も、アロワ《居るよ》でなくオジャロワ《居りますよ》と、相手と同様の言葉遣いの品位を保つのがよいとされる。

（５）イタスによる敬意表現

イタスを使う‘あらたまった’物言いをすることにより、間接的に聞き手あるいは第三者に対する敬意と自己品位保持を表現する。動詞 —i 形の後に置かれる。イッショケンメニ シータソイテ。《一所懸命いたしますので》（男・明中→筆者）、ウレシカンヌーテ、オミータシタラ。《嬉しいだろうと存じました》女・明中→女・明後）、キエワ コギエタソ ガ。《今日はお寒うございます》（女・明中→筆者）などと用いられる。

5. 完了・過去・回想的過去の表現

島外者にとっての八丈語理解の難関の１つに完了あるいは過去に関する表現法がある。ここで今までに詳しく触れなかった問題を二、三とりあげてみる。

○～ッチャで示される回想的過去をめぐって。

何人かの人たちが集まって、ある仕事を済ませた後、ばらばらっと別に

挨拶もなくそのうちの数人が帰っていったとする。その光景をよくよく思い出しながら話すとなれば、アンモ シェズン キャーッチャ。《何も言わずに帰ったっけ》ということになる。もし、皆がきちんと、ソイジャー シツリーシテ。《それでは失礼して》などと挨拶して別れたことの明確な記憶に基づく回想的過去ならば、アイサツシトッチー キャーラララー。
 《挨拶してから、帰ったっけなあ》と言う。また —oã 形を使ってアイサツシトッチー キャーロァ ガ。《挨拶してから帰ったが》となると、回想的気持ちは薄れ、過去の出来事を特別な思い入れなく語る語り口である。また文末期のガによって表現緩和がなされ、いくらかいていねいな感じを与えている。また、アイサツシトッチー(カ) キャーラレ。《挨拶してから帰った》は、アイサツシトッチー キャーラララー。 とほぼ同じことで、過去の出来事を、回想的な気持を持たずに表現している。ただ前者は、「おざなりなソイジャぐらいの軽い会釈をして帰っていった」ということを暗示するようなニュアンスがある。

6. 成分後置とたたみかけ連文による表現

樫立方言の文構成が、その大勢において日本語一般の有する文構成の諸特徴を共有していることは言うまでもないが、2つの特に目立つ点を述べてみたい。ただしこれらの特徴は他の八丈方言についても多かれ少なかれ認め得るものである。

一つは、主題成分が陳述成分の後に、修飾成分が被修飾成分の後におかれる文構成である。例えば次例のようになる。

コワケ ワラ ハヤ。

疲れた 私は もう。(男・明後→筆者。老人会でかなり酔い、歌も踊りも終りの頃)

この文では、通常、文末部におかれるコワケ(陳述成分)がワラ(主題成分)より前に、また、コワケ(被修飾成分)がハヤ(修飾成分)より前におかれている。これは主題成分は陳述成分より前に、修飾成分は被修飾成分より前にという通常要請される文構成法とは違っている。共通語でも、他の日本の諸方言でも、このような先行成分の後置は可能である。しかし、樫立方言においては、既にいくつかの文例が示しているように、また第5章の自然会話を通覧することによっても分るように、この成分後置

が目立つ。

上記の例は、全体で1文と解釈しうる場合であるが、後置された成分の前で前文が終り、後置成分はもはや成分でなく文となり、さらにその後には後置成分がおかれれば、それも新たな文となる場合もある。すなわち、次のような場合である。

コワケ¹ジャー。ワ¹ラー。ハ¹ヤー。

疲れたよ。私は。もう。

この連文構成は、ワ¹ラ ハ¹ヤ コワケ ジャ。という通常の1文構成より、強い訴えかけの力を持っている。このような連文構成を「たたみかけ連文」と称することにする。文節位置の転換と同様にたたみかけ連文もまた、自然会話の中で高い頻度を示している。

7. テ／デ接尾の活用成態の反復

無活用助詞テ（交替形デも含めて）が、動詞・形容詞・名形詞に接尾されて作られる活用成態はしばしば2回、時にそれ以上反復され強調表現となる。既にいくつかの文例に見られたが、さらに2例を加えよう。

ミカンガ クサッテ クサッテ コマロ¹ダー。スグ モッテ クルワ¹ジャー。

蜜柑がどんどん腐って困るんだ。〔なくなりそうになると子供が〕すぐ持ってくるんだよう。（女・明中→筆者）

サキワ ノマレル、ノッデ ノッデ、モッチャクデ ユルモ ネサセナイ ヨ。ソフ シズオカノ ムコ¹ガー。サケノミ¹デー。

酒は飲まれる、飲みどうしで。うるさくて夜も寝させないよ。その静岡の娘婿が。酒飲みで。（女・明中→筆者）

共通語においても、このような反復はしないでもないが、樫立方言ほどに頻度は高くない。共通語ではこのような場合「どんどん」「ずんずん」「ぐいぐい」「せっせと」などの擬態副詞を用いる方法をとる方が普通である。小宮山才次氏が、八丈語は擬態副詞に乏しいのでテ／デ活用成態の反復をするのであろう、と筆者に説明されたこととも思い合わされるのである。

ついでながら、樫立方言でも共通語と同じくドンドンという擬態副詞は

使われる。しかしこれも反復することが多い。例えば、ドンドンドンドンミッテ ミッテ《どんどんどん行って行って》と言ったりする。いずれにしても反復強調表現の頻用はこの方言の一特徴といえるであろう。

む す び

20分ほどの自然会話から出発して、どんな方言生活の世界が描けるか、そんな気持ちでとりかかった仕事であった。その後、肉付けのための2回の樫立訪問で、八丈島が身近に感じられるようになった。なかなか聞きとり、理解するのに苦労だった樫立言葉も親しみやすいものとなった。しかし研究はまだこれからという感を強くしている。未解明のままに残った問題も多い。方言の世界は広くて深いということを改めて痛感させられている。

原稿に記した樫立方言の文例・語句例等について総点検をしてくださった小宮山才次先生（八丈町元教育長）に厚く御礼を申し述べる。

本稿を草するに当たり、八丈島の下記の方々にご協力を頂いた。ここに
ご氏名（アイウエオ順・敬称略）を掲げ厚く御礼申し上げる。

伊勢崎頼母・みさえ夫妻	伊勢崎新次・千代美
伊勢崎正一夫妻	伊勢崎政太郎
伊勢崎民子	磯崎幸信夫妻
故奥山おなよし	奥山重明
奥山和昭・栄子	奥山明夫夫妻
奥山繁	大沢康兼
河崎倉三郎	佐々木敏治
佐々木文一・文子	佐々木榎喜
佐藤さとる	間仁田もと
峯元勝太	矢田惣八
矢嶋たまを	山下タケヨ
故山木政三	山本義光
山本富敏夫妻	福寿会一同

（以上樫立在住）

小宮山才治	（樫立出身，三根在住）
伊勢崎八千代	（樫立出身，大賀郷在住）

磯崎乙彦	(檜立出身、東京在住)
奥山弘子	(檜立出身、中之郷在住)
菊池昭代	(同上)
秋田今江	秋田計・久美子
秋田裕康・友子	森正道・つる子
山田守弥夫妻	
	(以上中之郷在住)
浅沼常吉	菊池一男・百合子
	(以上三根在住)

() 内の在住は、昭和55年の時点においてである。

参考文献

- 国立国語研究所『八丈島の言語調査』(昭和25年)
 大間知篤三『八丈島 民俗と社会』創元社(昭和26年)
 飯豊毅一「八丈島方言の語法」(『国立国語研究所論集Ⅰ ことばの研究』所収)
 (昭和34年)
 近藤富蔵『八丈実記』緑地社 第1巻(昭和39年) 第3巻(昭和46年) 第6巻
 (昭和47年)
 平山輝男『伊豆諸島方言の研究』(昭和40年)
 牧野富太郎『牧野新日本植物図鑑』(昭和41年)
 磯崎乙彦『八丈回顧』(昭和52年)
 八丈町教育委員会『八丈島誌』(昭和53年)
 内藤茂『八丈島の方言』(昭和54年)